

---

# 恋愛成就サイト

淵トマト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋愛成就サイト

### 【Nコード】

N2705Y

### 【作者名】

淵トマト

### 【あらすじ】

クラスでも目立たない存在だった近江美夜子。

好きな人に想いを伝えることも出来ず、日々陰鬱に過ごしていた彼女は、ある日思わぬ機会に遭遇する。

### 『恋愛成就サイト』

人々の恋を叶える夢のようなサイト。

このサイトに出会ったことによって、美夜子の運命は大きく変わっていく。

## 愛の始まり

蜿力纏上ニ諱九 諱イ纏励・蠹・ヲ b 縲 纏・r 苒昂 纏区ア  
コ蠹・ 纏、纏九 纏上 闇ヲ纏励・蠹・ヲ b 纏ゆj 纏セ纏帙s  
縲& amp; ; # 6 5 5 3 3 ;  
纏雍・纏才纏、綱医 纏溘 纏顔捺纏・ 雋工譁ケ纏才纏ツ縲。  
纏呈・蟆ア纏輔 纏九% 纏イ纏悟・譚・纏区イウ 蛻ウ纏後 纏翫  
纏呐? & amp; ; # 6 5 5 3 3 ;  
諱九r 譁仙lア纏輔 纏九。蜷ヲ纏九・雋工譁ケ纏ヨ 莠帑コ句刈貂  
帑ク? 纏、縲& amp; ; # 6 5 5 3 3 ;  
雋工譁ケ纏梧 譁昂r 隕九 纏溘極髻雍。纏峨? イ工譁ケ纏ヨ 驕  
句多纏ツ 螟峨o 纏九・纏ア纏呐? & amp; ; # 6 5 5 3 3 ;  
豎コ譁ユ 纏剃ク九@ 纏溘・纏工纏峨? 纏・ココ 纏ヨ 蜷榭燕纏定  
イ倅・纏励 纏上 纏輔> 縲& amp; ; # 6 5 5 3 3 ;  
纏昂l 纏ア雋工譁ケ纏ヨ 誼ウ纏・ 游ア纏上l 纏セ纏呐? & amp; ;  
# 6 5 5 3 3 ;  
纏ウ纏・ 縲 イ工譁ケ纏ヨ 諱九 邏? 譁工纏峨@ 纏・ 纏才纏工  
纏翫 纏呐h 纏・ 糞補? & amp; ; # 6 5 5 3 3 ;

### 恋愛成就サイトより抜粋

少し錆びと壁に伝う罅割れが目立つ校舎。

決して設備が整っているわけでも、敷地が広大という訳でもない。

登校してくる生徒の群れは気品などという高尚な代物を持ち合わせ  
てなどいない。

上にも下にも尖ってはいない学力の持ち主の集まり。

平凡という言葉がお似合いの共学校が私の母校だ。

古いスピーカーから流れゆくチャイムが休み時間を校内へと運ぶ。

保たれていた校内の静寂は硝子に銃弾を撃ち込まれたように粉々に砕け散る。

皆は退屈な授業で溜まった疲労を癒すために、思い思いに友人たちと雑談に興じる。

それは私のクラス、二年九組も例外ではない。

皆の会話が入りまじり、不協和音を奏でる。

昨日の夕食やテレビについて、どの歌手が好きかなどなど、四方八方から騒音が飛び散る。

教室の端で一人、耳に入ってくる不協和音を、私は疎ましげに思いながら机に顔を埋めていた。

私は会話には入らない。

他愛もない話で休み時間を潰すのは有意義ではないと考えているから。

まあ、友達が少ないというのもあるのだけれど。

御陰でクラスからは暗い女というイメージを抱かれている。

近江美夜子は影女と指を刺され、笑われることもある。

他人からの印象なんて至極どうでもいいことだったが、それだからかわれるのは不愉快だった。

クラスの一部の女子は私にちよっかいをかける。

苛め……という域にまでは達していないが、冗談で済ませられる域でもなかった。

しかし、抵抗すると過激になる可能性があるのです、私は無視を決め込む。

それが功を奏しているのかは定かでないが、今のところ平穏な学園生活を送れている。

「ねえ、朋也くん。今日暇かなあ？」

媚びるような猫撫で声を出しているのは、私にちよっかいを出してくるクラスメイトのリーダー格、相沢水琴。

金色に輝く髪と耳に空いたピアスの穴。  
パンツが見えそうなほど短いスカートに、キツめの香水。  
今時のギャルを絵に描いたような女、それが相沢水琴だ。  
趣味を男漁りと豪語するほどで、男をとつかえ引つ変えしている  
というのが彼女の語る武勇伝らしい。  
しかし、最近は色々な男に目をつけることはなくなっただらしい。  
というのも、一人の男に狙いを絞ったのが理由だそう。

今、話しかけた朋也くん……、もとい摂津朋也がそうだ。  
バスケ部のエースで人当たりも良く、学業もそこそこ。  
すらりとした筋肉質な長身に短めの髪。  
淀みのない純粹な瞳はいつも輝いて見えた。  
彼は一般的にいうところのイケメンの部類に入るのであろう。  
それに、誰にでも分け隔てなく接する裏表のない男。  
これだけの要素を備えていれば、もてるのも無理はない。  
現にクラスの女子の大半は彼に好意を抱いている。  
勿論、私もその例に漏れず……いや、何でもない。  
それでいて、男子にも僻まれないというのは人望の厚さからか。

「悪い、今日も部活なんだ。また今度誘ってくれよ」  
朋也くんは丁寧な言葉を選んで断りを入れる。  
水琴は少し残念そうに膨れっ面を見せたが、やがて取り繕うように  
笑顔を浮かべながら「それは仕方ないよね。じゃ、また誘うからね」  
と言って自分の席へと戻っていった。  
朋也くんはあんなみたいなのに構っている暇はないんだよと、心の  
中で毒づく。

「あんだ、今ざまあみるとか思ってたでしょ」  
心の中を見透かされてどきりとする。  
伏せた顔を上げて見ると、薄く茶色に染まった短髪の女が立っ  
た。

「鞠……」

私は唯一の友達の名前を呼ぶ。

この柗木鞠の見た目は誠実、清楚とは少し遠いものだ。最初、私が抱いた第一印象は良いものではなかった。

けれど、話しているうちにその認識は間違ったものであると気づく。私みたいな奴にも気さくに話しかけてくれた。

困っているときには手を差し伸べてくれた。

いつしか私は、彼女に心を開いていた。

彼女は見た目とは裏腹に、優しい心を、他人を思いやる心を持っている。

見た目はあれだけど根は……という典型的な例である。

というか、彼女は確実に見た目で損している。

折角そこその容姿を持っているのに、その見た目で敬遠している男子も少なからずいるだろう。

「そんなはずないでしょ。別に水琴がどうなったところで知ったことじゃないし、興味もないよ」

「あはは、じゃ、そういうことにしておいてあげましょうかね」

鞠は笑いながら話題を流す。

さつきから好奇心に溢れた鞠の瞳が燦々と輝いていた。

何か本題があるのだろう。

こういう目を鞠が見せるときは決まっている。

「鞠、また何か面白い都市伝説でも見つけてきたの？」

私は鞠が話題を切り出す前に聞いてやる。

「ありや、流石あたしの親友だね。その通りよん」

満足そうに笑みを向ける鞠はさながら子供のようだ。

鞠は都市伝説とか、その類の話を大好物としている。

何処からか話を仕入れてきては私に話すのが鞠の楽しみだ。

何時の間にか話を聞かされているうちに、私まで都市伝説などの話

に詳しくなってきた。

「で、今日はどんな都市伝説について聞かせてくれるの？」

「お、興味津々って感じだね。何時の間にかあたしの話はあるの楽しみへと昇華されていたのね」

「ふん……。一応聞いてあげただけよ。興味なんてないわ」

鞠はツンデレって奴ですか？ とからかい混じりに呟いてから本題へと移る。

「それで今回の都市伝説なんだけど、何と！ 恋愛が成就するっていうサイトの話なのよ！」

一人ポルテージを上昇させていく鞠を尻目に私は、「へえ、そんなの」と、素っ気なく相槌を打つ。

「そして今回は……凄いなだね。今までの話とは比べ物にならないほど」

「勿体ぶるわね。そう言うからにはそれなりのものなんでしょうね」鞠は不敵な笑みを浮かべながら携帯の画面を見せる。

「これは……URL？」

「その通りよ」

鞠の携帯画面には何かのサイトへと繋がるURLが表示されていた。さっきの話から察するに……。

「これが、恋愛成就のサイトのURLってわけ？」

鞠は御名答というように頷く。

「へえ、アクセスしてみましょうよ」

私の提案に鞠は首を振る。

「多分、あなたの思うような成果は見られないと思うけど。それでもいいなら」

そう言いながらURLからサイトへと接続する。

「……！」

私の目に飛び込んで来た文字は歪な物だった。

「諱区・諱仙ーア纏才纏、綱医 纏医 纏薙 縲よ 荳ㄥ纏ヨ透ク  
審九・蜷榊燕纏呈・險控@縲・。斐r猪ヨ纏九 纏工纏後i驟 ソ。  
綱憫ち綱ウ纏呈款纏励 纏上 纏輔>」  
携帯画面に表示されているのは私が読める言語ではなかった。

「文字化けしてるの？」

このような文字は何度か見たことがある。

ソフトウェアやハードウェアのトラブルなどが原因で起こるらしい。  
「そうよ。だから内容を解読することは出来ない。けど、確かにこ  
こは恋愛を成就させることが出来ると言われているサイトよ」

「ふーん」

「どう！？ 興味沸いたでしょ！？」

「いや、そんな馬鹿馬鹿しい話に興味はないけど」

恋愛を成就させることが出来るというだけでも胡散臭さが半端じゃ  
ないが、サイトが文字化けしていてどうやってこの都市伝説が広ま  
ったのか。

そもそもこのサイトは本物なのか。

疑問を挙げればきりが無い。

まあ、都市伝説にそこまで突っ込むのは無粋なのかもしれないが。

「ま、一応URLは送つといてあげるから」

そう言うと鞠は私の携帯を取って、赤外線通信を始めた。

止めても無駄なので何も口出しはしない。

そうしていると、授業の始まりを告げるチャイムが鳴った。

「それじゃ、また仕入れてくるわ。楽しみにしておきなさいよ」

そう言い残して鞠は私に携帯を返し、席へと戻っていく。

私の携帯のお気に入りサイトには恋愛成就サイトが追加されていた。

「なあ、今さ、何話してたんだ？」

前の席の朋也くんが私に話しかけてくる。

唐突だったので戸惑ってしまふ。

「あ……撰津くん。何か、都市伝説を教えてください」

「柀木は都市伝説とか好きだもんなあ。俺はそういう話は怖いから嫌いなんだけどさ」

朋也くんは照れ笑いを浮かべながら頬を掻く。

「さつき鞠に教えてもらったのは、怖いとかそういう類のものじゃなくて……。恋愛が成就するってサイトがあるって話」

「へえ、そんなサイトがあるのか。そいつは凄いな」

興味深そうに相槌を打ちながら朋也くんは続ける。

「そのサイトがあれば、意中の相手と近づけるってことだろ？ 夢

のような話じゃねーか」

「そうかもしれないね」

屈託ない笑顔を振りまいていた朋也くんの表情が少し曇る。

「でもさ、そんなサイトに頼って成就した恋で当人は満足出来るのかな」

私は次に繰り出す言葉を探す。

自分の記憶から、語彙から、最良と思われる一手を選び出す。

「私には……分からないよ」

曖昧に誤魔化す。

自分では答えられかねない問いだから。

そもそも、この問いには深い意味などない。

サイトが存在して、効力があると仮定しての話だ。

サイトの文字が化けていて、効力がない状態ではいくら議論しても意味はない。

「悪かったな。いきなり変なこと聞いちゃってさ」

「うっん、気にしなくてもいいよ」

教師が来たのでそこで会話は終わる。

私は少しだけ鞠に感謝する。

鞠の提供してくれた都市伝説の話の御陰で朋也くんと話せたのだから

ら。

浮かれすぎていたのか、気づけば皆起立していて、私一人だけが座っている状況になっていた。

教室の一番端で尚且つ一番後ろの席なので目立つようなこともなく、教師も、皆も気づいていないようだったが。

私の存在感が薄いというのもたまには役に立つものだ。

皆が着席してから、教室全体を見回す。

いた。

私に気づいている人が……否。

私を鋭い眼光で睨む者が。

相沢……水琴。

私が一人だけ起立してなかったとか、そんなつまらない理由ではない。

純粹な憎悪を孕んだ瞳が私を真っ直ぐに見据える。

背筋に悪寒が走っていくのを感じた。

何か……落ち度があったのだろうか。

自分に明確な憎悪の感情をぶつけられるだけの何かがあったのだろうか。

記憶のデータベースから情報を探る。

直ぐに答えは見つかった。

私が……朋也さんと楽しそうに会話していたから。

該当するとすればこれが原因だろう。

水琴は私を良く思っていない。

その上、自分が狙っている男と談笑していたとすれば、気分を害すのは容易に想像できた。

水琴は自分勝手に短絡的な女だ。

同じクラスになって数ヶ月しか経っていないがそれぐらいは分かる。

私は目を逸らすように手元のノートへと目を落とす。

これは少々厄介なことになるかもしれないな……と思った。  
授業終了のチャイムが鳴り響く。

授業内容が何一つ頭に入らないまま終わってしまった。  
ふと顔を上げてみると鞆が教室から出ていくのが見えた。

「美夜子……あなた、ちよつと来なさいよ」

水琴が私に威圧的な言葉をかけて教室から連れ出そうとする。

何時の間にか私の周囲の席は空席になっていて、水琴一人が私の前に立っている。

これでは誰かに助け船を出すことも出来ない。

何も答えずに俯いていると胸元を掴まれる。

「無視してんじやないよ……！ 朋也くんにも馴れ馴れしくしゃがんで……」

やはり理由はそれか。

予想通りの展開だが、予想していたからどうこうできるといってもない。

「私は……別に馴れ馴れしくなんか……」

否定するが水琴は聞く耳を持たない。

「前々からあなたのことは気に食わないと思ってたんだ……。これは丁度いい機会かもしれないわね。来なよ」

敵意剥き出しで私を教室から強引に連れ出そうとする。

何人かの女子がこちらを見てにやにやと粘着した笑みを向けているのが見えた。

この教室には私の味方はいないのは明らか。

体育館裏に着いた途端、壁にもたれる私の顔の横に水琴の両手が置かれる。

逃げられないようにか、威圧するためかは分からないが、私の不安を煽るのには十分だった。

濃い化粧で塗り固められた顔が近づく。

「あなた、調子に乗ってるからさ……。可愛がってあげるよ」

歪んだ笑いを浮かべながら舌なめずりをする水琴。

駄目だ……抵抗するすべはない。

ここには人が滅多にこない……、やられる……。  
諦めたように目を閉じる。

やってくるであろう苦痛から目を背けるために。

「おい、何やってんだよ」

聞こえるはずのない声、いるはずのない人。

でも、確かに彼はそこにいた。

「摂津……くん」

「朋也くん!？」

思わぬ人物に驚く。

「な、何で朋也くんがここにいるの!？」

「朝練の時に体育館の施設を忘れちまってさ。それよりお前らこそこんなところで何してんだよ」

「い、いや……ちょっと捜し物があって美夜子にも探すのを手伝ってもらったの。まあ、もう見つかったんだけどね」

真っ赤な嘘を並べる水琴。

何時の間にか拘束は解かれていた。

私は水琴から距離を取る。

「そうなのか。優しいんだな、近江は」

そう言つて朋也くんは私の頭を撫でた。

「えっ……!？ ええっ!？」

私は突然の出来事に酷く動揺する。

顔が紅潮して火を吹いてしまいそうだ。

朋也くんの大きな手は優しく温かい。

「ははっ、じゃ、俺先に行くから」

「う……うん」

朋也くんは手を振つて教室へと戻っていった。

私は呆然とその後ろ姿を見つめていた。  
予鈴のチャイムで私は我に返る。

「命拾いしたわね」

短くそう言ってから水琴は戻っていく。

「助かった……」

胸をなで下ろす。

もう怖がらなくてもいいはずなのに、私の心音はずっと高鳴っていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2705y/>

---

恋愛成就サイト

2011年11月6日04時15分発行